
モノクロxリンク

Asakkyo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロ×リンク

【Nコード】

N2124Z

【作者名】

Asakkyo

【あらすじ】

高校生・山田ヒリュウは、ある日、白と黒の二色で創造された王国　モノクランスに迷い込む。モノクランスホテルで彼を待っていた少女・モノックとの出会いが、後に彼の運命を狂わす――。

プロローグ

その昔、現世を出た先にそれはそれは巨大な四角い透明な箱があった。何も入っていない箱。

その箱は、やがてある神に見つけられ、新たな世界を入れられた。箱の中に創造された新たな世界には、名前が付けられる。創造主である神　モノクレイは考えた。

「黒と白で出来た世界を創造したんだから……、モノクランスが良いだらう」

後に、住人5000万の王国が出来、繁栄していくそれは、こう名付けられた。

神・モノクレイが創造した新世界　モノクランスと。

第1章 001 (前書き)

第1章 001〜第1章 002の書き出しぐらいまで書きます。
他の作品より読みにくい構成ですいません……

第1章 001

第1章

あの日の夜。少年・山田ヒリュウはいつも通りにテレビの電源を入れて、好きなアイドルのニュースだけチェックして、いつも通りにお気に入りのiPodで好きなアイドルの曲をヘビロテして、お気に入りの雑誌を読んで休日の服装を考えて、クラスメイトで僕の片思いのあの子とデートする自分の妄想をついでにして……。そんな日常を謳歌していた。

彼は、その後どうしたかは忘れた。気付けば、ここに居たのだ。モノクランス王国の中に。

彼・ヒリュウは、とりあえず、ペしゃんこになったスライムの如く地面に寝そべっているその体を起こして、辺りを見回してみる。

振り向けば、そこには見た目17〜18階建ての 外側の全ての面を灰色で塗りつくされた ひよろ長い建物が。

(ここはいつたい？)

目を凝らしてじっと見つめる。表には、【モノクランスホテル】とある。

しばしじっとそのホテルを見上げてぼかんとしていると、白いスーツを着た男の人に声をかけられる。

「君が……、山田ヒリュウくんだね？」

優しげに尋ねてくるあたり、この人はきっと紳士に違いないと思っただヒリュウは、素直に答えた。

「はい」

老紳士はにこりとすると、僕をホテルの中へ連れて行く。ロビーに来ると、老紳士はヒリュウに深々とお辞儀をすると、どこかへ立ち去る。

ヒリュウはロビーに置かれた高級か否かのいまいち謎なグレーのソファに座り、居眠りする。

その数分あとだった。

「あ」ヒリュウの背後で、聞いた感じでは16歳ほどの少女の声
が。

「んみや……？」薄目を開け、声のした方を見る。

「やっぱりそうよ！」少女は、ヒリュウの背中に向かって何やら
叫んでいる。

少女はヒリュウの座るソファに向かって走ってくる。距離にして
25センチのところまで立ち止まる。雪のように白い肌、線の細い容
姿、とりわけヒリュウの目を引き付けるのは銀色の大きな瞳。ホテ
ルの証明の光に反射して輝く銀色の美しい。

「貴方が、山田ヒリュウくんなのねえ？」目をキラキラさせなが
らこちらを見つめ、さっきの老紳士と同じことを聞く少女。

「そうだけど、何か？」ヒリュウは答えた後に悔しそうな顔をす
る。

今のでは好感度ガタ落ちじゃないか。感情をストレートに出
してろくなことの無かった僕のこれまでを思い出し、更にガツクリ
した。

「やっぱり、貴方がヒリュウくんだったのねえ！」

頭を抱えてうずくまる少年の様子なんて華麗にスルーするどころ
か、少々馴れ馴れしい呼び方をしてくる彼女。少年はきつとこう思
っただろう。

何なんだコイツは。

ヒリュウと少女はエレベーターに乗り、グレーの27階まで上が
る。

ヒリュウが、エレベーターのボタンを見ていると、少女が微笑む。
後々、ヒリュウが名前を聞くと、少女はモノックというそうだ。

「初めて来たんだよね。あとでこの世界について詳しく説明して
あげるわ。そのために、さっきの紳士に地図を用意させたんだもの」
ヒリュウは、そっか、と軽く頷いた。

グレーの27階に着いた。

エレベーターの中の壁やボタンも扉も全てそのようだが、白・黒・グレーの三色しか使われていない。それはエレベーターを降りても同じで、床もドアも壁も天井も、照明も、この3色で統一されている。昨夜までは、赤や青やピンク、オレンジに緑、金とありとあらゆる色を無意識に、日常的に見ていたヒリュウにとって、このモノクロな世界はとても異様なものに見えたはずだ。

「不思議でしょ？」

ヒリュウの前を歩くモノツクが笑う。

「君の説明を早く聞きたくてワクワクしてるよ」

「いったい、どうなってるんだこは……？早くこの世界のシステムとか誰が創造したのかとか、知りたいな……。彼の歩くスピードが早くなる。」

しばらく歩いた先に、その部屋はあった。ドアの色はグレー。早速、モノツクが開けてくれ、先にヒリュウを中へ入れる。

「すげえ……。僕、色んなホテルに泊まってきたけど、ここまで地味な部屋は初めてだ」

あれ……？僕、変なこと言った？モノツクの顔が引き攣って見えるのは何故なんだろうなあ。

「……まあいいわ」モノツク表情が変わる。

「説明を始めるわ！いい、しっかりと聞くのよ？一言も聞き逃してわいけないんだからね？いいかしら？」

人差し指を真っ直ぐこっちに向けて言うなよ。あ。………そうだ。ちよつと閃いたから、聞いてみるか。

「あのさ、もし一言でも聞き逃したら、僕、どうなっちゃうの？」
即答だった。

「教授の話によれば、この世界で死ぬことになっちゃうらしいわよ。でも、貴方なら大丈夫だと思うわ。モノクロタワーに上れるのは貴方ですもの」

最後の言葉、意味深だな。

「ていうか、早く説明しろし……」

待ちきれねえ。早くこの世界について知りたい。

「あ。ごめんごめん。では、始めるわ」

モノツクの口から、この世界が語られる――。

第1章 002

「この王国が出来たのは、その世界が創造された後なの。王国の始まりはね、一人の少年と一人の少女がお互いを好きになって大人になった時、王・妃になることを前提に神・モノクレイが二人を結婚させたのよ。そこまでは良かった」だんだん、モノツクが暗い顔になる。

何だよ、怖いじゃないか。

「けど、何かあったの？」

「良かったんだけど……、結婚してすぐの頃、二人は色の話で喧嘩をしてしまうの」

「喧嘩……？」

モノツクが頷く。

「そう、喧嘩をしてしまうの。この発端は、当時の王国の色についての話し合いなんだけれどね。その頃は白と黒しか色が無かったの。ある日、王が王国を白一色にしないかと妃に提案したの。もしたら、黒好きの妃が怒ってね……。やがてそれは王国一のニュースになって、ついに国民が色のことで戦争を始めてしまうの。これは後にモノクランス戦争といわれる、未だに続いている争いごとなのよ。これはね、白の領域に住む白の住人と、黒の領域に住む黒の住人が、白を好む王のために、黒好きの妃のためにお互いの土地の面積を少しでも広く取ろうという思いから始まったの」一呼吸おいて、続きが話される。

「国民の争いが始まってしばらく経った頃、王と妃は国民の争いに心を痛み、王はやはり二色にしようと改心したの。そしたら、妃が白と黒の境界線を決めようって言い出したの」

そんなの、どうでも良くないか？と、僕は思うけど。

「王はね、そんなの決まる分けないうって言ったの。でも妃は決めたいうって言うの」

また喧嘩か……。

「今度は解決したわ。妃の、グレーという白と黒を混ぜた色を新たに一つつけてそこに境界線を引こうっていう案でね。」

なんだそりゃ……。始めからそうすりゃ良かったんじゃないか。

「でも、土地の争いは無くならないのよねえ……。無くなるどころか、あなたの世界で昔起きていたことが、こちらでも起きてるよつで……」

「どうしたんだろうねえ？」

エレベーターに乗った時から、何となくは気付いてたけど。

「白の領域に住んでる者は家の屋根からテレビ、ラジオ、文字まホワイトメインで何もかも白に統一しなければならぬという白の領域条例と、黒ブラックトメインの領域に住む者は何もかも黒で統一しなければならぬという黒の領域条例っていうのが出来たのよ」

「誰がそんな条例を……」

「国民の間で何十年と続く戦争を見てきた王と妃よ」

色のことでそんなに長いこと争うなんて……。呆れてものも言えないよ僕は。そもそも、争いなんて起こるのがおかしいんだ。この国には譲り合いの精神は無いのかね……。

「まあ、この王国で長いこと続く土地の取り合いの話はおいといで。次の説明をするわね。」

第1章 001 (後書き)

会話文で終わるってどうなんだろう?と思いました。この辺で区切りますね。

自分の文章力の無さに泣けますorz

次こそはもっと高めな文章力で皆さんに楽しんでもいただけるよう頑張ります。

第1章002

彼とモノツクは、一度ホテルを出ると、まずモノツクの言うモノクロタワーに向かう。ホテルからモノクロタワーまでは距離が短く、数分で着いた。

「ほほう。これがモノクロタワーか」

そこには高さおよそ数百メートルはありそうな、巨大な白黒のチエック模様の塔が聳え立っている。

「このついでを見つめて、先に探すのは入り口。」

ヒリユウは白と黒の間にあるグレーの扉を見つけた。

「ねえ、あれって入り口だね？入ってもいいのかな？」隣にいるモノツクに尋ねる。

「ダメよ。そこに入れるのは王と妃とあの塔の最上階に住んでるモノクランサーだけだもの。あ。モノクランサーっていうのはね、この世界に生まれ育った者のことをいうのよ」

「モノクランサー、か。現実世界より、こっちの世界のが面白そうだな。」

「へえ……。それじゃあ入るのは諦めるか。……で、ここに僕を連れてきたというからにはそれなりの話があるからだろう。どんな話かな？」

モノツクの口から語られるこの塔にまつわる話を早く聞きたいのか、ヒリユウはそれとなく急かした。

「それは、今から数年前のこと。一人の少女がこの塔　モノクロタワーにやってきたの。その少女はもちろん、モノクランサー。名前はドメイン。彼女は幼い頃に、あのモノクランス戦争に巻き込まれて、両親と逸れてしまったの。それからしばらく一人でモノクランス王国を歩いて、下宿先を探したの。でも、誰も彼女を泊めようとはしなかったわ。仕方なく街中を歩くことを続けていたら、この塔　モノクロタワーの前に辿り着いたのよ。ドメインは迷わず

その中に入っ、中にある階段をひたすら上って、上って上って、上り続けて、最上階を目指したの。最上階に着くと、そこには何故か手紙が置かれてあったの。それは、何も書かれていない、白い紙だったんだけどね。彼女は気にせず、床の上に寝て、一晚過ごしたわ。次の日の朝、目が覚めたら、モノクロタワーの上のほうにある丸い形をした窓に、大きな黒猫の顔があつたの。黒猫は言ったわ。

しばらくそこで暮らさない。そうすれば、一人の勇敢な人間が現れる。彼と秘密の契約を結んだ時、君に良い知らせが舞い込むことだろう。って。ドメインはその言葉を信じて、再び眠りに入ったの。その日以来、彼女は今も眠り続けているわ、あなたの到着を待ちながらね」

ヒリュウは頷く。

・ ・なるほど。だんだんと見えてきたぞ。

「どんなモノクランサーなんだろうなあ、そのドメインさん。会ってみたいけど、それは僕がこの王国で大活躍してからののか。：

・ ・よし、わかった」

モノツクが先を歩く。

「じゃあ、次の目的地へ行くわよ」

・ ・次の目的地にはどんなエピソードが込められているんだろう。

第1章003

次に二人が向かったのは海辺。

「ここはね、夜になるとモノクランス戦争に巻き込まれたモノクランサーのお化けが出るのよ。」

「お化けか。僕は、現実主義者だからそういうのは信じないんだよね」

お化け。という言葉が気になったのか、モノックが怪訝そうな顔をして聞く。

「ゲンジツシユギ……って、何？」

やべえ、上手く説明できない。

言葉に詰まるヒリュウ。

「何でもないや。気にしないで」苦笑いしてその場の空気を濁そうとするヒリュウ。

しばし、二人の間に沈黙が流れる。

モノックは海に向かって砂浜を蹴り、水平線を見る。

「この海の間こうには、この世界が入られた箱の壁があるのよねえ……」

やっぱり、ここは面白そうだ。滞在し甲斐がありそうだ。しばらくここに居させてもらおうかな。

つられて、ヒリュウも海の間こうに視線を向ける。

「ねえ、もつと僕にこの世界　モノクランスについて聞かせてくれよ」

一面グレーで統一された歩道の上を歩く二人。先を歩くモノックが、振り向く。

「次は、秘密基地よ。今夜、早速あなたに戦ってもらってから、その準備つてことで、着いたら着替えてもらつわよ？」

え？着替える？何に？

一瞬立ち止まるヒリュウ。

「戦うのは、まあ、モノクロタワーで話聞いてた時に何となくわかってたけど、着替えるって何に……？」

うふふ、と微笑みながら、前を歩くモノツク。夕陽に照らされた彼女の長い髪が、ふわりと揺れる。

「それは、目的地に着いてからということだ」

海沿いの歩道を歩く二人の姿は、どこか温かなものがあった。

「着いたわ。ここよ、ここ」

今度は、大きな倉庫。外側の壁は全て白。つまり、二人はもう白^{ホウ}の領域^{イトドメイン}に入ってしまったのだ。

モノツクが重たい扉を開き、ヒリュウを中へ入れる。

「うっわぁ……」

そこは、まさに白の世界。窓からカーテン、床、手すり、壁……全てが白で統一されている。

「あ」後から入り、扉を閉めたモノツクが、倉庫の奥を見て叫ぶ。ヒリュウも同じ方向を見る。すると、そこに居たのは

「ああ、君がヒリュウくんか。待ってたぜ」白一色に統一したスーツを着た、銀髪の青年だった。

誰だろ……？彼もモノクランサーに違いないんだろうけど。

男は二人に近寄ると、初対面のヒリュウにお辞儀する。

「ようこそ。モノクランスへ。俺はホワイジヨだ。よろしく」

「さあ、時間が無いわ。早く着替えなくちゃね」モノツクがヒリュウの腕を掴んでキョロキョロします。

「あはは。大丈夫だよ、初代モノツク。焦ることはない。何たって、俺のは超ハイテクスーツだからな」

顔を上げるなり、けらけらと笑うホワイジヨ。

「何だかよくわからないけど、まずはその超ハイテクってやつを見

せてくれよ」

ヒリュウとホワイジヨは一時モノツクと別れ、倉庫の奥へと進む。

第1章003(後書き)

字数が気になりますが……、いずれは加筆修正する予定なので、多めにみてやってください……

第1章004

「何これ」そこにあっただのは、グレー一色に統一された着物だった。

ホワイジヨが横から解説を入れる。

「これがその特殊スーツ。本当は別のやつを注文する予定だったが、君が現実世界の日本から来ると聴いて急遽これになったってわけ」ホワイジヨがその着物を指差す。

ヒリユウは近寄りながらホワイジヨの話に耳を傾けている。

「注文？どこかでこれが大量生産されてるってことですか？」

「そう。ここには白の特殊スーツがたくさんあるが、グレーの……しかも、着物バージョンなんて無いから、俺が注文したんだ。これは境界線上に建つ店、工場にしか無いからな。せえせえ、大事に使用え」

ホワイジヨが颯爽と歩き、ヒリユウより先に着物を取ると、「ほれ。今からこれはヒリユウのもんだ」と言い、着物を着る本人の胸に押し付ける。

「……………」

渡された着物を見、数秒間の躊躇の後、恐る恐る受け取るヒリユウ。ホワイジヨは着物から手を離すところ続けた。

「着物と言えば刀。着物に刀と来たらちよんま……いや、そこまですなくても、あの刀さえあればお前はたちまち強くなる。いや、最強になれると、俺は思うぞ」

「……………はあ」両手の平にある着物とホワイジヨを見て、頷くヒリユウ。

「とりあえず、このダンボール箱の山の奥にある試着室で着替えて来いよ。お前が着替え終わる頃には、あいつが来るからよ」と言い、ホワイジヨはヒリユウに向かって手を振る。

ヒリユウは何か聞いたそうな顔をしたが、すぐに試着室に向かい、

着替えた。

試着室のカーテンが開く。

「ホワイジヨさん……」

着物が置かれていたイスの前まで来ると、既にホワイジヨとモノツクが待っていた。先に気付いたのはモノツクだ。ヒリュウと目が合った瞬間、微笑む。

「あ。お疲れー。似合ってるじゃん、それ」ヒリュウの着物姿を見るなり、嬉しそうな顔をするモノツク。

「さすが日本人！侍って感じるわー」

「何その微妙な感想は」ため息混じりに言うヒリュウ。

「てか、この世界との住んでた現実世界って、繋がってたんだ？」
ホワイジヨが反応した。

「ああ。そうさ。実は、ヒリュウくんが住んでいた現実世界は、俺たちモノクランサーの住む世界の下に存在しているんだ。モノクランスっていうこの世界は、普通の現実世界の人間たちには見えな
いし、ここには来れない」

倉庫の中に溜まる、鉄の臭いを吸い、ホワイジヨは続ける。

「けど、ヒリュウくんは違った。君は、他の人間には無い素晴らしい能力と今着ているものとの相性が非常に良い。だから君を選んだんだ」

そこまで言うと、ホワイジヨはヒリュウに刀を差し出す。

「これって、日本刀……？」

「見た目は普通の日本刀。でも、そいつはいざとなれば恐ろしい力を発揮する。そいつを使う時は、気をつける」

鞘の位置を少しずらし、刀の腹の部分を見る。

「まあ、戦う時に敵に向かって一振りすればわかるさ」苦笑気味にホワイジヨ。

「ねえ、もう行きましょ。時間が無いわ」モノツクが時計を見るや否やジタバタしだす。

「そうだな。そろそろだ。……ヒリュウくん、また今度会おう。」

今日はもう行け」

そう言いながら、ホワイジヨはヒリュウの制服を入れた大きな袋を差し出す。

「あ。いつの間にそんなことを……！親切にしてください、ありがとうございます。また来ます」

ヒリュウは片手を上げると、そのままモノツクを追いかけて、倉庫の扉の向こうに消えた。

いつの間にか陽は暮れ、代わりに闇が下りていた。

「うつわ、暗くて何も見えねえじゃん」

先ほどまで何ルクスあるか知れないほどの明るさの照明に照らされていたため、明るさのギャップで少し揺らめきながらも、足の筋肉に力を入れることと気力でどうにか立っているヒリュウ。

「大丈夫？これ使って夜道を照らして」そう言って差し出したのはグレーで統一された懐中電灯。

「これもやつぱ……」「はい、ごちゃごちゃ言わずに歩くわよ。もう時間が無いんだから。ひよっとしたら、奴らはもう来てるかもしれないわ」

ヒリュウの着物の裾を掴み、引っ張りながら歩き出すモノック。

「何だかよくわかんないけど、了解！」

二人の歩むスピードは速くなり、目的地が見える頃には走っていた。

「ヒリュウ氏はまだかにゃ？」

髪の毛一本一本からつま先までをすべて黒で覆い尽くしたモノクランサーが聞く。

「はい。もう間もなく現れると、幹部から連絡がありました」黒の玉座に座る、黒装束の男の横で、黒電話の受話器を下ろす執事モノクランサー。

「ふむ。待つにゃん」膝を抱え込みながら、どこか嬉しそうな顔をする男。

この男、かつてはモノクランス王国の王を暗殺しようとして失敗し、グレーの檻の中に収容されていたのである。しかし、彼は執事

と何度か会い、作戦を練って脱獄したのである。朝になり、すぐにそれは王国中を震撼させるニュースとなった。その日の朝刊の一面には脱獄した男とその執事の名前が載っていた。

“ マルティージェュ、脱獄！ 執事シャットンと共に ”

それから数年が経ち、彼らは森の中に隠れ、そこに住んでいた。そんなある日、執事が苦勞して用意してくれた黒電話に、あるモノクランサーから電話が掛かる。

「 もしもし、初代モノツクだけど………？ 」

電話の向こうから聞こえてきたのは、初代モノツクの声。

「 君にゃんか。僕に何の用かによ？ 」

当時、初代モノツクと彼 マルティージェュは恋人同士だったが、王暗殺未遂事件で初代モノツクがマルティージェュに別れを告げ、破局したのである。

そんな元恋人からの突然の電話。マルティージェュは復縁を願った。「 夜更けのモノクロ×リンクに参戦してくれない？ 私の力だけでは勝てそうにないわ 」

モノクロ×リンク 。それは、年に46回行われる、モノクランサーなら誰もが知ってる試合ゲームなのである。この試合は、王国を狙う魔物を正義のヒロイン・グレーキャットが倒す様がまるで何かの試合をしているように王国の民には見えたため、こう呼ばれている。それぞれの武器で戦い、どちらかが息絶えたら倒した者の勝利。非公式の武器で戦ってはならない。というのがこの試合のルール。勝った者は次の回以降、新たに参戦した者と戦う権利を得られる。その試合で負けそうだから、次の試合で一緒に戦ってほしいという話を初代モノツクは彼としていたのである。

「 それと、今、倉庫に居るんだけど、ヒリュウさんとこれからモノクロフィールドに向かうから、宜しく 」

電話は一方的に切られた。

「 そうにゃんか 」マルティージェュは受話器を執事のシャットンに

渡すと、鼻の前で手を組み、何も言わなくなる。

数十分後。モノツクとヒリュウがモノクロフィールドに到着する。

「また眩しいなここも……。さっきの倉庫より眩しいじゃねえか」
眩しさに腕で顔を隠しつつ、ヒリュウはモノツクに視線を移す。先ほどまでは暗闇で見えなかった彼女の姿を見る。モノツクは上半身を黒の幅約30センチのリボンのようなもので巻かれ、その上に黒のプリンセスラインのようなドレスを着ている。髪は下ろしたままだ。ヒリュウは足元も見る。モノツクは黒のロングブーツを履いている。

「何よ、ジロジロ見て」ヒリュウの視線に気付いたのか、モノツクが言う。

線が細い彼女のドレス姿を見、思わずキスしそうになったヒリュウは、慌ててフィールドに視線を戻し、眩しさに再度驚く。

「否、何でもない」

「行くわよ」

モノツクに促され、ヒリュウはおよそ46段は裕にありそうな階段を下り、グレーのコート上に立つ。

「奴らはまだ来てないみたいね」

既に戦闘モードに入っているモノツク。

「さつきから気になってたんだけど、奴らって？」

周囲に目を光らせ、どこから攻撃が来ても応戦できるようにしているモノツク。

「これからここに来る敵よ」

「敵って？」

「魔物よ。貴方が住んでいた世界に滞在していた悪霊がこっちの世界に入る前に変化したのが魔物よ」

その魔物が現れた時、モノツクの元恋人のマルチージュが執事を連れて来た。

敵は、モノツクの思っていたより遅く来た。

「来たわね。行くわよ、ヒリュウくん」

黒のロングブーツがグレーのフィールドを蹴り、中を駆ける。

「あ、待って」

一歩遅れてヒリュウも駆ける。

黒のドレスは空中に閃光を放ち、魔物たちの気を引く。

その隙にヒリュウが刀をやみくもに振りながら魔物の背後を狙い、一気に斬っていく。

「うああああ　！！」

魔物は次々に消え、残るはあと2匹となった時、モノツクがヒリュウに声をかける。

「何？」敵を見ながらヒリュウが聞く。

「貴方、刀の扱いがめっちゃくちゃだわ。事前に時代劇見といて良かったわ。貴方にはその装備は向かないわね。……兎に角、そこに居る敵には一突きで充分だから」モノツクが自分の斜め前に居る敵を指差して言う。

「一突きね、了解」

フィールドの地面が揺れる時、二人は敵に向かって走り出す。

「とうっ……！！」

五歩目で地面をローファーが蹴り、宙に向かって跳躍。刀を横に持ち、敵に向かって突き刺す。

『グアア……』敵はうめき声を上げて消滅。

「おりゃー！！」隣で、モノツクが叫ぶ。

彼女は手に持っている白い拳銃を敵目がけて乱射。敵は散りじりになって消えた。

「やったわ」黒のドレスがふわりと地面に降り立つ。

「どうにか勝てたな。これで終わり？」

刀を鞘におさめながら、ヒリュウが聞く。

「そのようね。……ちょっと、貴方たち、何で一緒に戦ってくれないのよ」モノックが、およそ10メートル後ろに居る観客に向かってほえる。

観客たちは拍手をしつつ、ヒリュウたちに向かって歩きだす。

「いやあ、新入りのお手並み拝見のつもりで、ちょっと見させてもらったにゃん。……いやあ、カツコ良いにゃん。見ていて気持ちよかったにゃん」

ずっと見ていたくせに……と、小さな声で文句を言うモノック。

「どこがカツコ良いのよ。あんなのめちゃくちゃよ」

ヒリュウが隣で膝をついているにも関わらず、さらに追い討ちをかける。

そんな二人を見ていられなくなったのか、執事が主人に耳打をする。

「なあ、初代モノック。そいつと一緒にパーティーでもしないかにゃん？執事がセツティングしてくれるそうだにゃんし」

パーティーという単語に反応し、目を輝かせるヒリュウ。

「パーティー？！僕も行きたい！！連れてっておじさん」

主人は一瞬怪訝な顔をしたが、すぐににこりと笑い、「良かろうにゃ。まあ、初代モノック次第なのだけねどにゃん」

君はどうする　マルティージュの視線が、執事の視線が、モノックに集中する。

「私は……」一瞬、口ごもる。

「ううん。私も行くわ」

ヒリュウが手を叩く。

「じゃあ、決まりだね」

第2章 001（後書き）

相変わらず、成長してないなあ。と、書きながら自分の文章を反省
しています。

いつか、加筆修正をしたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2124z/>

モノクロxリンク

2011年12月29日16時46分発行